



学校概要

本校は昭和五三年に北海道静内高等学校から分離独立し、日高管内唯一の全日制課程の農業高校として開校しました。所在地は観光名所として有名な二〇間道路校並木に隣接する自然豊かな場所にあります。

また、ここ日高は全国の約八割にも及ぶ軽種馬生産数を誇る馬産地でもあります。



そして、その良質な馬糞堆肥を利用したミニトマト生産も盛んです。創立四十二年を迎える現在は、幾度かの学科変更を経て、食品科学科と生産科学科の二学科のみとなりました。生徒数は一二五名在籍しており、その内道外や札幌市等の遠隔者が約一七％在籍しています。

学科紹介

(一) 食品科学科

食品科学科では、原材料生産から加工製造、販売までの一連の流れ（フードシステム）を学び、食の安全・安心・信頼を大前提とした食の総合的技術者を育成しています。また、加工部門では、生徒たちが生産した生乳・野菜を自分たちで様々な形に加工する他、地域の特産物を用いた商品開発の研究にも取り組んでいます。

(二) 生産科学科

生産科学科では、農産物（野菜・作物・草花）と軽種馬の生産に関わる栽培技術や飼育技術について学び、地域の主幹産業に携わる人材を育成しています。二年次よりコース展開しており、施設園芸と軽種馬生産それぞれを

中心とした学習に分かれて、専門性を深めます。特に馬コースでは、年一頭の割合でサラブレッド生産に当たり、種付けをはじめ、妊娠鑑定やその後の繁殖牝馬の管理、セリでの販売、出産まで全て授業として行っています。これまでに中央競馬三勝のユメロマン（平成十四年生産）、一勝のゴーゴ－ヒューガ（二十年生産）などの実績があります。



特色ある教育活動

〔高等学校OPENプロジェクト〕

（馬の担い手育成）

(一) はじめに

軽種馬生産は日高の農業産出額の六三％を占める重要な基幹産業ですが、近年、生産頭数や生産農家戸数は減少傾向にあり、

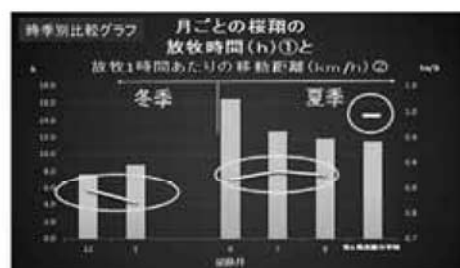
馬産業の担い手不足が深刻化しています。

現在本校では、道教委指定事業の「高等学校OPENプロジェクト」に取り組んでいます。これは、高校生が地域の課題解決に向けた研究を行うもので、平成三〇年度から三力年の指定です。本校では、地域の課題を馬産業の従事者不足と馬の魅力発信不足と捉え、専門性の高い学習を行い、馬産業の従事者を増やすことに加え、馬の魅力を地元小学生や町内外へ発信することに取り組むことを考えました。そこで「馬で地域の活性化〜強い馬づくり〜」と「馬産地日高の魅力発信」と題して二つの研究活動の実践を進めています。

(二) 馬で地域の活性化

〜強い馬づくり〜

昨年度から、強い馬づくりに向けた新たな取り組みとして、日本軽種馬協会（JBA）静内種馬場にご協力いただき、GP



GPSによる運動量の分析					
放牧時間	天気	最高気温	最低気温	最大風速	
2018	-0.37	0.19	-0.26	-0.22	-0.11
2019	-0.29	-0.17	0.65	0.56	-0.47
要因	疲労	相関なし	生物学的要因	風	

S（人工衛星を利用した位置情報計測システム）機器を活用した馬の行動調査を行っています。近年、本校の生産馬は、レースで勝てなかったり、故障で引退してしまうケースが続きました。このことを受け、どんなトレーニングにも耐え、走り続ける丈夫な馬を育てることが必要だと考え、育成方法の見直しに向けて分析を進めています。本校生産馬の育成における課題として、毎年一頭しか生産していないことから、他の生産牧場と比べて、当歳馬（0歳馬）に

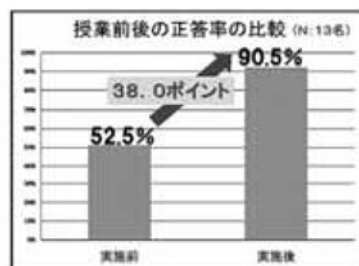
重ねにより、昨年までの研究では運動不足の傾向にあることなどを数値化して現状を明確にしました。今年度は、人為的に運動量を増やすためデータを基に計画的なひき運動などを実施し、適切な運動量を増やすとともに、季節毎の気象データを収集して環境要因と運動の相関関係を考察したことで、放牧の質が向上しました。その結果、当歳馬一頭だけでも効率的な運動量の負荷をかけることができ、理想的な馬づくりができました。ま

適した遊び相手がいなかったり、競う相手がいなかったりすることから、運動量がまったく足りていないという課題がありました。そこでGPSデータの積み重ねにより、昨年までの研究では運動不足の傾向にあることなどを数値化して現状を明確にしました。

（三）馬産地日高の魅力発信

馬産地の担い手不足の現状を受け、未来の担い手を育てる取り組みを行っています。今年度、町と連携した取り組みである「ひだかうまキッズ探検隊二〇一九」の受入では、小学生に楽しく馬の魅力伝えるために、高校生が趣向を凝らした企画を準備しました。中でも馬に乗って行う「だるまさんが転んだ」や馬の餌作り対決は好評でした。

また、昨年度から静農生が講師となり、新ひだか町内の小学校を対象に馬の魅力を伝える「馬の授業」を実施しています。今年度は十一月に桜丘小学校の三・四年生が来校し、高校生が考案した「うま博士にな



桜丘小学校「馬の授業」の馬の知識の定着度調査



小学生を招いて実施した「馬の授業」

以上のことから、地域の魅力を子どもたちに伝えることで、馬産業の後継者育成と馬の魅力発信という課題解決に向け、活動することができました。しかし、評価する上で、小中学生への学習会の回数や参加人数による活動評価に留まったため、目標の達成度について、関係機関や生徒にアンケート調査等も行う必要があります。

今後は活動の評価を工夫し、生徒が活動の成果を実感できるようにすることで、生徒の主体性をより引き出した活動を展開していきたいと考えます。

(四) 高等学校OPEN

プロジェクトの成果

実践研究においては、全国有数の馬産地として、地域の教育力を活かした専門性の



北海道大学静内研究牧場にて日本在来馬「ドサンコ」についての学習



外部講師を招いた馬の繁殖育成技術講習会

高い学習ができました。外部講師を招いた先進的な馬の繁殖育成技術講習会では、積極的に生徒が質問をするなど、課題解決に向けて考える姿勢が見られました。また馬

利用学の授業では、馬の調教学習で身に付けた知識をもとに、生徒が馬の調教法を考え実践することができました。二年度の今年は新たに北海道大学静内研究牧場への訪問で日本在来馬「ドサンコ」の生態や活用について学ん

だり、新ひだか町博物館学芸員の方に日高が馬産地となった背景について講義していただき、馬産地日高について理解を深めました。馬産地として栄えた頃の日高の様子を記録したハミリフィルムを見せていただき、それを見た生徒からは、このような「馬の町」の姿を取り戻したいと強く感じたとという声も聞かれました。地域の馬産業について理解することで地域課題に気づき、生徒がその解決に向けての方策を考える姿勢が見受けられました。

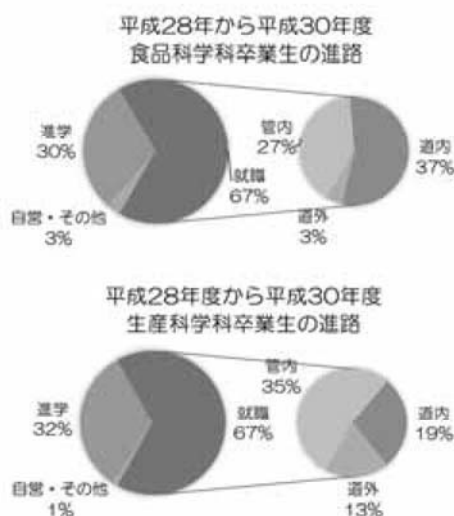
このような、多方面での地域の教育力を活用して、地域の身近な問題を長期的視点で課題解決することや最先端の技術を用いて科学的に課題を解決する取り組みが、生徒の主体的に取り組む姿勢を育んでいると考えます。今後はより一層、農業の見方、考え方を身につけ、深い学びに繋げる上で、教科横断的な視点で指導の工夫に努めたいと思います。

馬産業の後継者育成の取り組みの成果は、

すぐに数字として現れませんが、継続的な取り組みが必要であり、地域の方々から「ぜひ継続してほしい」と高い評価を得ているので、指定事業終了後も継続できる内容と体制も同時に検討していきます。三年目にあたる来年度は、研究成果を地域に還元できるよう取り組んでいきます。

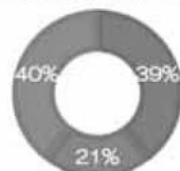
進路

本校卒業生の進路については例年就職希望者が七割、進学希望者が三割です。また



平成28年度から平成30年度
生産科学科馬コース卒業生進路

■馬関係 ■馬関係以外 ■進学



就職については、管内と道内を希望する者が多いという特徴があります。各学科の進路については次のようになります。

まず食品科学科については、就職六七%、進学二〇%、自営・その他三%となっています。就業先は道内希望者が管内希望者を上回ります。これは本学科の生徒が就職先として製造業やサービス業の希望が多く、その企業が管外にあることが挙げられます。

次に生産科学科については、就職六七%、進学三三%、自営・その他一%となっています。この数値だけをみると食品科学科と大差はありませんが、就職先が異なります。

本学科の生徒は管内を希望する傾向があります。これは本学科には馬コースがあり、卒業

後は馬産業に携わる者が多いことが理由として考えられます。データをみると、馬コース選択者の約四〇％が馬産業従事者になります。このことから地域の基幹産業の担い手育成において、本校の教育が大きな責任を担っているといえます。

その他にも、進学においては四年制大学に進学する生徒や各種専門学校へと進学する生徒など幅広い進路選択者がいます。こうした生徒の多様な進路選択をサポートするために、三年間での系統だった進路活動を実施しています。

本校での進路活動は一年次の職業理解、自己理解に始まり、実際に就労を体験する二年次のインターンシップ、一、二年次での学習をもとに具体的な進路決定のために三年次のコース別進路学習、デュアル派遣実習、企業派遣実習、さらに夏季休業中には進路対策講座を行っています。

また、今年度からは生徒自身で学校での活動を振り返り、自身の成長を促すという

効果を期待しデジタルポートフォリオを導入するなど、生徒が進路活動を通して主体的に考え自己決定していけるような進路指導を実践しています。以上の活動の成果もあり、平成二六年度より進路決定率は一〇〇％を継続しています。

おわりに

本校の学校目標は「自ら考え正しく判断できる力を養い、たくましく生涯を生きる生徒を育てる」です。地域に根ざした農業教育の実践を基礎とし、これからも地域課題解決に向けたプロジェクト活動等を通して、地域産業人としてはもちろんのこと、社会の発展に寄与できる人材を育成していきます。

今年度の三月に高等学校OPENプロジェクトに取り組んだ二年目の生徒が卒業します。このプロジェクトに取り組んだ生徒は、軽種馬産業の担い手、そして普及者として、将来は日高の馬産地を盛り上げてほしいと

思っています。また、大学進学者には軽種馬生産現場のIT化やグローバル化に向けた先進の軽種馬生産の手法に繋がる学習を身につけ、さらなる発展に寄与してほしいと願っています。

生徒には、卒業後に家業である軽種馬生産を継ぐ者もいます。生産科学科三年生の岩山菜々子さんの実家は三石の軽種馬生産牧場です。「レースで勝てる強い馬作り」を目標に、後継に向けて日々勉強に励んでいます。学校の授業以外にも日本中央競馬会主催のファームコンサルタント研修に参加するなど、さらに実践力に磨きをかけています。また、研修に参加し地域の軽種馬産業関係者と交流することで、地域の馬産業の発展に貢献したいと話しています。卒業生たちの今後の活躍に期待しています。

※執筆・写真提供は、教諭 松田優志先生
にご担当頂きました。